

『ガルブレイス』を読む

「アメリカ資本主義との格闘」の副題がついた伊東光晴先生の岩波新書新刊である。先生の本は若い時から数多く読んできた。はしがきに次のように書かれている。「2012年2月、私は倒れて心肺停止になり、幸運が重なり、一命をとりとめた。しかし身体は不自由であり、ガルブレイス没後10年に完成を目ざし、自らを励ましてこれを書いた。」90近い先生のおつい思いが伝わってくる。

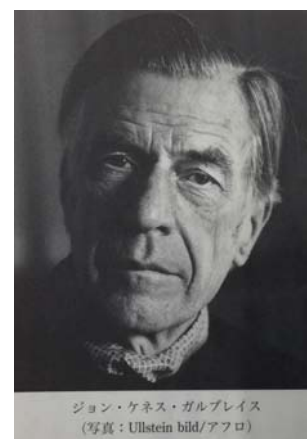
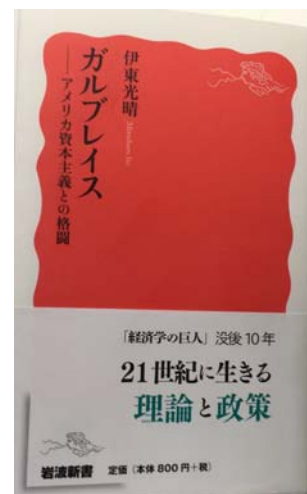
表紙カバー裏から—20世紀アメリカを代表する「経済学の巨人」は何と闘い続けたのか？ アメリカ思想の二極対立をえぐり、経済学研究の水準を社会思想史研究の水準に高めてきた著者が、病をおして筆を進めた渾身の作。ケインズによってイギリス論を、シュンペーターをかりてドイツ社会を論じてきた社会経済思想史研究三部作の完結編。

ガルブレイスの本は、大阪市立大大学院の宮本ゼミで何冊か読んだ。当時、難解なガルブレイスに何回も悪戦苦闘した。今回、先生の的を得た解説により、理解できたことも多かった。本書で学んだなかでガルブレイスの「経済学三部作」について書いておきたい。

ガルブレイスは、一国経済を二つに分ける。一方には技術が動的に進歩し、大規模の資本を擁し、高度に組織された数百の法人企業が存在し、他方には何十万という小規模な、伝統的個人企業が存在している世界である。この二つの部門は非常に異なっている。それは程度の差ではなく行動原理—ガルブレイスの言葉をかりれば—「努力それ自体への刺激誘因を含め、経済上の組織および行動のすべての側面まで入りこんでいる差異」である。

ガルブレイスの経済学三部作のうち、『新しい産業国家』は前者の分析であり、後者を取りあつかったのが『経済学と公共目的』である。この二冊が、かれの経済学の建物であるとすれば『ゆたかな社会』は、この建物の「窓」(windows)であると、かれは言う。

『ゆたかな社会』は、ガルブレイスの名を有名にした著書であり、かれの主著と目されており、20世紀後半を代表する本とも考えられている。窓が爽やかな風と外の光をとり入れるように、経済学の中に新しい考えをとりこんだ名著である。



(2016年3月30日)